

CACアメリカ駐在員事情

CACアメリカ

鈴木拓也 杉本雄二 山下隆久

1. はじめに

今回、この場を借りてニューヨーク市マンハッタンにあるCACアメリカの駐在員の生活を紹介したい。

CACアメリカは、1989年の創立以来、クリスマスツリーで有名なロックフェラーセンターにあるビルの45階、正面にはエンパイアステートビルが見えるという素晴らしい眺望の場所にあった。そして2003年、ウォール街のニューヨーク証券取引所近くにある、ニューヨーク市がハイテク産業用に開発したビルに移った。

社員は26名で、そのうちCACからの出向者5名を含め日本人は19名。通常社内にいる社員は6名ほどで、ほとんどは顧客先にコンサルタントとして常駐している。顧客は主に金融・商社などの日系企業の現地法人だ。業務内容は、日本のCACと同様、システムコンサルティング、システム構築、ユーザーサポートなど。しかし、日本のCACのような数十人規模の大きなプロジェクトはなく、一人ひとりが直接顧客と対話しながら仕事をしている。

2. 米国での仕事・日米の違い

当然ながら、歴史や風土の違いを反映した日米の違いが、仕事をする上でも表われる。

たとえば、米国人のやり方では各人の役割がはっきりしている。日本でならプロジェクト内の役割分担が、こちらでは職業としてきちり分かれているのだ。プログラマであれデータベース管理者であれ、各人が専門分野に対して高度な職業意識を持っており、互いを尊重し他人の専門領域には口を出さない。自分が現在担当している仕事だけでなく、常に自分の専門分野の新しい技術を取得し、レベル



左から、鈴木、杉本、山下

アップを心がけている。広く浅い知識の人間はあまりいないようだ。

残業する米国人は少ない。これは、突発的な問題が起きない限り変わらない。残業は、一見、会社のために働いているようだが、企業にとってはコストである。米国人に残業が必要な作業を依頼する場合、このOvertime（残業）は誰が払うのか？と問われることがある。顧客社内の問題なので、筆者がそう言われるときはたいていジョークだが、「残業＝コスト」という意識がしっかりあるのだと思う。したがって、上司は安易に残業が必要となるような作業依頼を受け入れたりしない。

筆者の顧客先では、16時半には人が帰り始め、17時を過ぎるとオフィスはガラガラ。締め処理を行う人間くらいしか残っていない。その締めも18時半には終わり、みな帰ってしまう。顧客は休みもきちり取るので、オフィスには常に空席がある。その分のバックアップ体制も整っている。顧客は年に1～2回、週単位で休暇を取り、音信不通になる。もちろん、皆が普段からパートナー分の仕事をきち

り理解しているので支障が出ることはない。こうしたバックアップ体制は見習うべき点だ。

また、システムにトラブルが発生した場合、リカバリに東京のチームにも絡んでもらうことがある。ニューヨークの20時には東京も業務開始だ。時差があるとコミュニケーションなどに不便と思われるが、こうした障害時にはプラスに働くこともある。

3. 2つの大災害と復興

ニューヨークへ来て5年の間に、筆者は2度の災害を経験した。2001年9月の同時多発テロと、2003年8月の北米大停電である。

同時多発テロでは、当社顧客もワールドトレードセンターの中にあり、本稿の執筆に協力した3名も約1ヵ月後の10月15日より移動する予定だった。システムに従事する我々にとって、多くの教訓を残した事件だった。オフィスがなくなるという想像しがたいことが実際に起こったのだ。サーバールームで保護されているはずのサーバーも失われた。事件以降、ドキュメントファイルはオフィスから離れた場所にあるサーバーに置くようになった。我々は、運用ノウハウを持ち顧客にサービスを提供するITの専門家であると同時に、1ユーザーでもある。その点で、自身のリスク管理が十分にできていたのか考えさせられた。システムの開発環境等のデザスタ・リカバリも十分に検討することが重要だ。

2003年8月14日の北米大停電は、現代社会がいかに電気に依存しているかを思い知った事件だ。

夕方、突然パチッと音がして、ディスプレイが真っ暗になった。空調も止まりハードディスクの回転が落ちていく音だけが聞こえてきた。担当顧客のオフィスに非常電源装置はあるが、オフィスの全ての機器に給電できるほどの容量はない。そのため、停電発生翌日は、離れた場所にあるデータセンター内のバックアップオフィスで業務が行われたが、すべての社員が出勤できるほどのスペースはなく、一部の社員が必要な業務のみを行うという形だった。この場合、普段と異なるオフィス環境にありながら、本来のオフィスと同様のデータアクセスができる必要がある。それには、事前に十分検討し準備しておかないことには対処できない。幸い、この大停電は大きな問題もなく乗り越えることができたが、日頃の災害復旧訓練の重要性を再認識させられた。

余談だが、停電の時、我家の最新式コードレス電話は機能しなかったが、通話だけの単機能の電話機は使用することができた。電話機では、本来、電話局の回線からの電気だけで通話はできる。電気を前提とした便利な社会は、その前提がくずれた時には逆に不便になる。世の中に絶対的

な前提はない、とつくづく実感した。

同時多発テロ以降、どこのビルでもセキュリティが強化されている。筆者は顧客のオフィスビルに常駐しているが、ビルのセキュリティデスクと顧客オフィスのセキュリティカードの両方を持ち歩かなくてはならない。訪問者も、ビルの1階受付で訪問先の確認を受けるため行列ができる。安全と引き替えに社会生活がかなり不便になっているようにも思う。

4. ニューヨークの生活

ニューヨークで生活する場合、マンハッタンおよび周辺4区（ブルックリン、クイーンズ、ブロンクス、スタテンアイランド）に住むか、さらに遠い郊外に住むかによって生活は大きく変わってくる。単身者はマンハッタン及びその周辺に住み職住接近の都市型生活で便利さを享受し、家族がある場合は、郊外のウェストチェスターやロングアイランドまたはその近辺で、家族のために住宅・教育環境のよい地域を選択する傾向がある。そうした郊外の場合でも、マンハッタンの中央に位置するグラント・セントラル駅まで電車で30分・1時間ほどの距離を座って通勤することが可能だ。

ニューヨークには日本と同様に四季がある。夏は暑く、冬は寒く、春には多くの草木が新しい芽を出し、秋には紅葉と落ち葉がある。冬はマイナス10度以下になることもあり、非常に寒い。ただ、アパートメントは建物全体が暖房されていて快適に過ごせる。ニューヨークでは法律により家主は貸し出す家の室内最低気温を保証しなくてはならない。「寒いけれど暖かいニューヨーク」なのだ。

また、サマータイムにより4月最初の日曜日から10月最後の日曜日までが夏時間となり時計が1時間早まる。つまり、日没時間を1時間遅らせるのだ。照明に使うエネルギーを節約でき、外が明るいことにより人々が活動的に



オフィスの窓から見える高層ビル

なって消費をし、経済的な波及効果を期待できるという。確かに外が明るいと心理的な開放感がある。日本でも是非導入してほしいが、難しいようだ。

ニューヨークでも喫煙者の肩身はかなり狭い。煙草は値上げが繰り返され、5年前は1箱3～4ドルだったが、現在では7～8ドルが一般的な価格だ。また、以前は小規模なレストランとバーカウンターでは喫煙が許されていたが、現在ではどこも禁煙となった。州単位の法律なので、隣のニュージャージー州ではまだ1箱4～5ドルでレストランでも喫煙できるところがほとんどのようだ。

オフィスビルでは喫煙ルームというものもなく全フロア禁煙。ビルの外では、冬の吹雪の日も夏の炎天下の日も、壁に寄りかかりながら、池の端に腰掛けながら、人々が喫煙しているのを見ることができる。喫煙者には非常に住みにくい街だろう。

英語には苦勞している。英語に限らずだが、簡潔に表現することは我々システムエンジニアやコンサルタントにとっても重要な能力だ。ニューヨークには英語を母国語としない人間が多い。オフィスでは、英語以外に、日本語、

韓国語、中国語、タガログ語、ヒンドゥ語、スペイン語、フランス語などが飛びかっている。中には筆者と同じくらい英語ができない者もいる。そういう相手とのコミュニケーションは慎重に行わねばならない。米国でシステムの人間として仕事をするには、業務知識だけでなく、分析力や理解力、そして要点を的確にまとめる能力も求められている、と感じている。

5. 終わりに

ニューヨークは特殊な街だ。人種のるつぼと言われ、世界中から人が集まっている。きれいな英語を話す人のほうが少ないのではないかと思う。その反面、我々日本人が外国人であるということをあまり意識せずに生活できる。経済の中心地でありながら、職住接近でき、世界的な観光地でもあり、文化面でも魅力的なものが多く存在する。機会があったら、ぜひCACアメリカへも立寄っていただきたい。